会　議　録

＜会議名称＞　令和４年度　第４回岸和田市小中一貫教育推進会議

＜開催日＞令和４年 10 月 11 日（火）
＜時　間＞15 時 30 分～17 時
＜場　所＞岸和田市教育センター　１階　視聴覚研修室
＜出席者＞　○出席、■欠席
（学校関係者）

和泉校長	北川校長	南教頭	上ノ山教頭	何森教諭	川本教諭
○	○	○	○	○	○

（教育委員会事務局）

片山学校教育部長（委員長）	松本学校教育課長（副委員長）	八幡人権教育課長	角銅指導主事
○	○	○	○

（学識経験者）

山口教授
○

＜議題等＞
１．教育委員会挨拶
２．協議
３．今後の予定

＜当日配布資料＞
・小中一貫教育推進計画の様式（案）

１．教育委員会挨拶

【片山委員長】

こんにちは。学校教育部の片山です。

本日も何かとご多用の中、第４回岸和田市小中一貫教育推進会議にご出席いただきましてありがとうございます。

先月に行いました第３回の推進会議では、岸和田市の小中一貫教育の方向性を考えるうえで、岸和田市教育大綱を基本に考えましょうということを、確認いたしました。また、先行して進めていただく、いわゆるモデル校区の要件についても協議をいたしました。

４回目となる今回は、先行していただく校区においてまず取り組んでいただく「めざす子ども像」の設定や、今取り組んでいることの整理に向けて、具体の計画書の様式を検討したいと思います。

そこで本日も、学識経験者として、関西福祉大学　教育学部 児童教育学科　教職センター教授　山口偉一先生にご参加いただいております。ご多忙の中、また遠方よりお越しいただき、誠にありがとうございます。どうぞよろしくお願いします。

１時間半という大変限られた時間ですので、委員の皆さまには、ぜひ積極的にご発言いただき、実のある会議にしたいと思います。

それではこの後、どうぞよろしくお願いします。

２．協議

【片山委員長】

協議に入る前に、本日はまず、小中一貫教育を先行して進めていただく校区について、前回の協議をふまえ決定したので、この場でご報告したい。

「桜台中学校区」にお願いすることにした。

桜台中学校区のそれぞれの学校においては、本推進会議での協議を十分にふまえたうえで、「めざす子ども像」の設定や、校区で今取り組んでいること、あるいはこれから取り組もうとしていることを整理し、小中一貫教育の観点から意味付けする作業をお願いしている。担当の指導主事が全面的にサポートしながら、くれぐれも学校の負担にならないよう、十分配慮して進めていきたい。進捗は、随時この推進会議で共有し、また協議が必要なことがあれば、その都度会議の議題として取り上げていきたい。

それでは本日の協議として、今回は事務局より「小中一貫教育推進計画のひな形」を資料として出していただいているので、この資料について事務局より説明をお願いしたい。

【角銅委員】

まず何よりも校区の実態からスタートするべきであろうという考えから、１番に校区の実態を記入する欄を設けた。それをふまえて、次に小中一貫教育の目標、それをさらに具体化しためざす子どもの状況。そういう子どもたちを育てるための具体的な取組みを記入するのが一番下の欄になる。裏面は年間の計画を書くようになっている。最後の組織の体

制については、年度途中の現時点では書きにくいと思うので、年度の変わり目に記入するといいのではないかと思う。
　先に取り組んでもらう校区には、実際に取り組んだことや、今後取り組むことが決まっていることを、この計画書に整理してもらいたい。来年度以降に他の校区が取り組む際の参考になるものを作りたいと思う。

【和泉委員】
　来年度に他の校区に見てもらうということは、今年度中にある程度めざす子ども像とかを作ってしまわないといけないのか。タイムスケジュール的にそこまでの余裕があるかどうか。

【角銅委員】
　そこまでは考えていない。まずは、今取り組んでいることを整理していく。４番の「重点的な取組み」や５番の「実施計画」から考えていけたらと思う。またそれぞれの校区と相談しながら進めていきたい。

【和泉委員】
　２番の「小中一貫教育の目標」が、それぞれの学校に学校教育目標がある中で、それぞれの学校の実態から考えても納得できるもの、なおかつ学校教育目標とずれないようにと考えると、かなり抽象的な感じになるイメージがある。観点を絞って、具体的なものを立てるようにする方がいいのか。

【角銅委員】
　私も少し悩んでいるところ。小中一貫教育の目標と学校教育目標とは当然関連すべきもの。どの学校にもそれぞれの学校教育目標があって、そのうえで小中一貫教育の中ではその校区としてどういったことをめざしていくかということ。学校教育目標が先にあって、その下に小中一貫教育の目標があるというイメージ。これについては、この場でもいろいろご意見をいただきながら考えたいと思う。

【松本委員】
　小学校は小学校で、中学校は中学校で、発達段階によって変わってくる部分もある。ある意味住み分けもしつつ、校区で１つ大きな方向性を作ってもらうイメージだと思う。

【角銅委員】
　小中だけでいうと、３つの学校教育目標が存在する中で、それをまとめていくのかとか、新たに小中一貫教育の目標を別に作るのかとか、どのようにすればわかりやすく進むのだろうというのは少し悩むところ。しかし、やはり校区として１つ同じ目標を持つというのは、まず必要なことであろうと思う。ひとまず来年度試験的に１年間取り組んでみて、その中でまた練り直してもいいのではないか。

【北川委員】
目標はとにかくきっちりと決めていきたい。
小中一貫教育で大事だと思うのは、複数の目で相互に理解すること。例えば生徒指導の会議は毎月行っている。しかし、現状は学校から担当者１人だけしか参加していない。これを２人３人など複数で関わっていくことも大切であろう。ただなかなか小学校から中学校を見に来るというのはない。この子どもたちが、こういう育ちをしていくということを、小学校の先生がイメージを持つ。中学校はこの子どもたちを受け入れた後どういうふうに育っていくのか。

【片山委員長】
この様式で言うところの、「小中の協働による具体的な取組み」の１つだと思う。

【南委員】
桜台中校区は、わりと複数で取り組んでいる。そういう取組み一つ一つを整理して形にしていけばいいのではないか。

【片山委員長】
今実際に行っている取組みの整理に当たるところだと思う。先ほどの、小中一貫教育の目標とめざす子ども像の関係性というか、小中一貫教育目標とはいったい何かということを、やはりある程度明確にしておきたい。そうでないとモデル校区が大変な思いをする。
小中一貫の目標は、学校教育目標をふまえつつ、小中一貫教育を通じて達成したい目標。記入例では、コミュニケーション能力の部分に力を入れたいと書かれている。場合によっては、ここに確かな学力という内容が来るかもしれない。小中一貫で、小学校と中学校が手を携えて取り組んでいって、何を目標にしたらいいのかということが、ここに明確に示される。そしてそれによって、どういう子ども像をイメージするのか。具体的で、誰もがそれをイメージできるような子ども像を記入する。

【山口教授】
今回先に進めていただく校区は、１中２小ということだが、同じ中学校区であれ学校の実態はさまざまだと思う。各校で取り組まれていることもあると思うので、それはそれで尊重しなければならない。それらを相互に理解した上で、中学校区で特に力点を置くことを、小中一貫教育目標として挙げていく。めざす子ども像については、具体的にどんなことができたら成果が上がっていると言えるか、いわゆる評価項目になるようなものを、設定する。授業で言えば、本時の目標にあたる。効果の測定については、各中学校区で何か指標を設定してもよいし、全国学力・学習状況調査の中から抽出し、経年で見ていくのもよい。それらを、保護者や地域の方とも共有することで説明責任を果たしていける。
資料で少し気になったのは、６番の「組織体制」の部分。組織体制をしっかりと校務分掌とリンクさせて、年度の終わりから年度初めにかけてしっかり作っておくことがとても大切。人頼りにすると、継続性が担保できなくなる。今年度はもうすでに年度の途中なの

で、暫定的に決めながら、年度の終わりから年度初めにかけて、具体の校務分掌ともリンクさせながら組織づくりを進めていくべきだと思う。

【片山委員長】
　このような様式をもとにして、取組みを整理したりめざす子ども像を考えたりといったことを、校長先生だけで話をするわけにはいかないので、やはり学校にある校務分掌の中でどなたかが担当になりながら進めていくことになるだろう。ただ、年度の途中から新たに小中一貫に関する部会を立ち上げるのは難しいので、今ある体制の中で考えてもらって、来年度新たに組織体制を作るときの参考にしたらいいのではないか。組織体制の部分については、進みながら考えていけばいいだろう。
　とにかく年度途中から新たな取組みをお願いするということなので、冒頭でも申し上げたように、担当の指導主事が全面的にサポートをしながら共に考えていけるようにしたい。

【川本委員】
　組織のことについては、私も大切だと思う。ただ、何か新しいことを入れ込んでいって、それが本当に実を結ぶようにするためには、やはりそこに集中できなければ無理だと思う。何か新しいことをするのであれば、やはり削るところは削っていかないといけない。中学校の部活動を外部委託するであるとか、採点業務やプリント印刷をサポートしてくださる人員を配置するといったことを、国は動き出そうとしているが、それだけではなく、この小中一貫教育に力を入れることに効果が期待できるのであれば、今まで行ってきた教育活動を縮小するか、あるいは全く取り換えるというような視点が、やはり必要だと思う。

【片山委員長】
　小中一貫教育というのは、今までの教育と全く関連がないわけではなく、この間の議論にもあったように、これまでにもさまざま取り組んできたことの延長線である。それをあらためて整理し直そういうことなので、全く新しい取組みをするということではないと思う。すぐに効果があるかどうかはわからないが、小中一貫教育を進めることによって、例えば生徒指導面において、小学校と中学校が違う考え方で進めていくことによって起こる弊害がクリアになるといった効果も期待できると思っている。
　進める立場の方としては、もちろん学校現場がさらに多忙になることは避けたいと思う。今すでにある取組みを整理するなど、やれるものからやるといった形で進めていきたいと思う。

【川本委員】
　小中が協働することは必要だと思う。例えば、中学校から小学校へ見に行く、小学校から中学校へ見に行くというのは、絶対必要だと思う。しかし、その時間をやはりどのように作るかということが大切。

【松本副委員長】
ただでさえ先生は仕事が多い。何かを減らしていこうというような動きの中で、働き方改革を進めていかなければならない。そんな中で、以前の会議でもお話させてもらったように、現場にいた当時、小学校と中学校が連携して取り組んだことで、忙しかったが元気になったという部分もあった。良い部分も含めて、取組みは慎重に判断しながら進めていきたい。

【八幡委員】
負担を感じずに長続きさせるコツとかはないだろか。

【山口教授】
要は日常化していくこと。新たに何か入ってきて、今までこんなことしなくてもよかったのにという気持ちを持つことは、必ずあると思う。しかし、これをすることによって子どもたちにどんなプラスな面が出てきているのか、また逆に今までと違った視点で自分の仕事を見つめ直すことによって、効率化を図れることが出てくる。
また、どんな取組みでも、メンバーが変われば形骸化してしまうことがあるので、途中途中でしっかりと原点に帰ることが大切になる。公立の小中学校としては、第一に学力に課題のある子どもたちに焦点を当て、お互いが仲間意識を持って取組みを進めていくという教育の原点に立ち返っていただきたい。例えば夏休みに、小学校と中学校の教員が集まって、そういうようなことを確認したり、個別の子どもの状況を具体的に共有し、腹を割って話し合ったりするような場と時を持つことは教員としての醍醐味を感じることにつながることと思う。
それともう一点。学力問題とも関連するが、授業改善についての取組をすすめていかなければならないことは全ての学校の共通課題であることに異論はないと思う。子どもたちに力をつけるために、魅力ある授業がなされているか。例えば、コミュニケーション能力をつけようという学校の方向性が示されているのであれば、自分の授業がそのような授業になっているのか。学習指導要領で示されている資質・能力を育成するような授業が本当にできているのか。少なくともやろうとしているのか。一人一人が見つめ直すきっかけになるような取組みを進めていくことが根本的な課題ではないかと思う。小学校と中学校が協働で、と言うが、最終的には自分の授業がどのように変わってきているかいうところに、お互いの話が向けばいいのかなと思う。

【片山委員長】
小中一貫教育というと、とても大きな話のように思うが、実際には個々の先生の取組みにかかっているということか。

【山口教授】
子どもに対する見方が変わる、自分の授業に対する見方が変わる、ということが大事だと思う。今まで気がつかなかった、見えないものが少し見えてきたり、小学校の先生の話

を聞いて、中学校の先生の子どもの見方が少し変わったり、逆に中学校に入ってその子の姿を見た小学校の先生が、自分の実践を振り返ったり、どうだったのかと感じたりとか。そういうことが、この取組みを進める大きな意義だと思う。一方で、働き方改革についても効率化できることはどんどんやっていかなければならないのは必然である。ただ、本質を見失わないようにしないといけない。働き方改革ばかりが前面に出ても、教育の本質的な部分がおろそかにされるようなことはあってはならないし、逆に大事なことはわかっていても、健康や、社会生活が満足できないような状況も良くない。バランスを取りながら臨機応変に取り組んでいくことが現実的なのではないかと思う。

【北川委員】
職員が倍になると考えたら強いと思う。学校経営の面から考えたときに、弱い部分を小学校とともに補完し合うことができるのは強いと思う。それが小中一貫教育の強みだと思う。

【片山委員長】
子どもも増えるが、大人も増えるという観点で考えると、確かに強みだと思う。

【何森委員】
２つ質問がある。
１つは、これからこの計画を立てていくということ等について、現場の教職員に対してどのように説明されるのか。今すでに取り組んでいることをまとめるということであったり、指導主事が全面的にサポートしたりといった話があるが、そういう話が教育委員会の方から説明されるのか、学校が説明するのか。つまりこの推進会議の場でさまざま議論があって進めてきた中で、この場で話題になったことが、ニュアンスも含めて伝わるというのはなかなか難しいと思うので、それがどのように進められるのかということが気になる。
もう１つは、働き方云々の話。今はこの推進計画を作る話が進んでいるが、今後の予定で言うと、例えば相互乗り入れであるとか、あるいは新たな科であるとか、こういうことは当然教育委員会として進めていこうとしているはず。見直す可能性があるという話はあるが、どのように考えているのか。やはり先ほど川本先生から出たように、実際に何か減らすということなしに進めて本当に大丈夫なのか。今回選ばれた校区でも、欠員が多いと聞いている。現場の方がどう受け止めるのか、モチベーションの問題と実務の問題と含めて丁寧に考えてほしい。

【角銅委員】
各校での説明は、校長先生からしていただく。ここで話し合ったことのニュアンス等が、十分にそれぞれの校長先生に伝わらないといけないので、説明するにあたっての内容について、こちらでまとめて校長先生に提供をしている。それぞれの学校で説明する内容に、ずれがないように、またここの会議で話し合われた趣旨や考えが、それぞれの学校で伝わ

らないということがないよう配慮して進めたい。今後進めるにあたって、同じような場面は出てくるかもしれないので、その都度今申し上げたような形で対応したい。

また計画については、令和２年の 10 月時点で作成した基本的な方針なので、以前から申し上げているように、内容については、この推進会議の中で話し合う中で、あるいはそれぞれの校区で計画を進めていく中で、当然変わってくるものと考えている。基本方針には、具体的な取組みが５つ示しているが、校区ごとにめざす子ども像を設定していくことについては、必ず全ての校区で考えていく。それ以外の部分については、この推進会議の場でも一度も話題にしたことはないので、当然今おっしゃったような相互乗り入れについても、じゃあやりましょうかと言って、そんな簡単にできるものではないので、それを本当にやるのかどうかも含めて、この会議の場でも検討していきたい。

ただ、取組みの３番として新たな科というのを設けている。これについても今すぐにできるものではないが、今後ぜひ実現していきたいと思っている。新たな科については、少しずつ話題に出しながら、委員の皆さんと一緒に考えていきたい。

したがって、基本方針に示している取組内容を、例えば来年からすぐにモデル校区で実施をするということはない。慎重に検討をしていきたいと考えている。

【松本副委員長】

そもそも、できることからというスタートなので、できないことも絶対出てくるだろう。場合によっては、基本方針に書かれているが、できないのでしないという選択肢もある。

【北川委員】

モデル校区の件について、桜台中学校区では当然話をすることと思うが、その他の学校に対してはこの話をいつおろす予定か。

【角銅委員】

いつと決めているわけではないが、先に進めていただく学校で完全に説明が終わった後、そう遠くないうちにと思う。

【何森委員】

負担が増えないということは、言わない方がいいだろう。せっかくのモデル校区なので、もしやるのであれば、取り組むために見合った負担を減らすことも、モデル校区で頑張ってもらうといい。何か大変なものが来るという話ではなく、なるほどそうすればできるのだということを、他の校区でもできると思えるようなことを、モデル校区で考えてほしいというようなことを伝えるほうがいい。

【片山委員長】

モデル校区で取り組んでいただく中身が、他の学校から見たときに、これであればできるというものでなければ、今後の展開がしにくくなっていくので、次の取組みにつながるような中身にしないといけないと思う。したがって、今回これをするからこれを減らすと

いう考えもあるし、何かと何かを合わせて効率化するというのもあるかもしれない。いろいろな手立てがあると思うが、趣旨としては、先に走っていただく校区については、次の取組みを進めていくにあたっての参考になるというか、このようにしたらできそうだというようなことを、取り組んでいただくということか。

【何森委員】
仕事の量を純粋に減らしてほしい。逆に言うと、小中一貫教育がないとしても減らさないといけない。具体的に量を減らすということは、質につながる部分がある。増えたことについて、上手に何とかやりましたというのは、やはりしんどい。

【川本委員】
小中一貫教育を進めていくために、どうしたらいいかということではないと思う。やはり良いことをするにしても、増やすだけだったら中途半端になってしまう。

【片山委員長】
捉え方はさまざまあると思う。しかし、義務教育を預かる公立の小中学校は、１５歳の卒業に向けて中学校区でどういう子どもを育てていくかを考えていくことは、それは至極当然なことで、全く新しい話ではないと思う。新たな小中一貫の何かということになれば、また別のプラスの取組みをしなければならないと思うが、義務教育を一つの塊として見れば、何か新しいことに取り組むということではないと思う。

【和泉委員】
今取り組んでいることの中で形骸化しているものがあれば、小中一貫を進めるかどうかにかかわらず、削ることは考えなければならない。しかしはっきりとした目的があり、子どもたちのためになっていて、達成感もある、子どもたちも成長する、ということであれば、引き続きみんなで頑張っていこうということになる。そういったコンセンサスが取れたらそれは残っていくだろう。小中一貫を入れるかどうかにかかわらず、見直しながら、より良いものにしていかなければならないと思っているが、一方で、小中一貫を進めることによって出てくる効果みたいなものがあると思う。例えば、業務が効率化されることで校務分掌を減らすことができるとか、小中一貫を入れることで見られた効果については、先に進めていく校区として提示できればと思う。

【山口教授】
小中一貫教育の捉えが、バラバラな感じで話がなされているように感じる。何か共同で行事ごとをしなければならないというような先入観が強くなってしまっているように感じる。各中学校区の小中一貫教育の目標達成にむけて、各々の段階で、それぞれに工夫された取組を行うことで、資質・能力を育成していくことに目を向けてほらいたい。例えば資料の記入例にあるように、小中一貫教育目標としてコミュニケーション能力を高めるというのであれば、小学校の段階では各授業で話し合いの時間をしっかりと確保し、それを

踏まえ、中学校では根拠を明確にして発信させるような授業をやっていくということになる。こういうことがとても大事だと思う。もう一度、どういう力をつけるために、つまりどのような資質・能力を育成するために小学校と中学校とが協働していくのかというところに焦点を当てたらどうか。一方、そのようなことを話し合う時間が必要となる。その点については、ICT を活用したり、話の中身を焦点化したり、工夫していく必要がある。または、小中一貫教育を進めて、効率的になったという点では、小学校の生徒指導だった。生徒指導に関して言うと、組織的な対応や保護者とのやり取り、関係機関との連携などのノウハウは中学校の方が持っている。そのノウハウ的なことが小学校に入ることによって、ずいぶん組織的・機能的な対応ができるようになった。逆に、授業に関しては、小学校の教科教育的な授業構成を、中学校教員が学び授業を見つめ直すようになってきた。

子どもにとって、また教員にとってもプラスになるようなことを、焦点化してやっていく。一方で形骸化しているようなこと、効果的でないこと、もしくは、本当はやった方がいいが、やると教員の負担があまりにも大きく増えるようなことはやらない、といった戦略的な取捨選択を、校長先生が中心となり進めていき、市教委がそれをバックアップしていく体制づくりができればよいと思う。

【片山委員長】

まず一つのキーワードとして、「必要性」が挙げられる。子どもたちにとって、本当に必要なものであるかどうかということ。子どもたちの力を高めるために、中学校区として取り組んでいくことは、小中一貫教育という冠がついていなくてもやっていかなければならないこと。それを、そういうふうなタイトルをつけてやっていくことによって、より推進する方向を明確にしていくというのが一つの形だと思う。

【上ノ山委員】

結局、小中一貫教育は手段であって、目的は我々教職員の指導力向上とか、校区の子どもたちの課題解決とか、地域とともにある学校作りとか、そういうことだと思う。もちろんそれを手段として選ぶ以上は、校区のめざす子ども像を共有しながら、そのために効果的だと思うことをそれぞれの学校で選んで取り組んでいく。それを小学校単体あるいは中学校単体で取り組むよりも、中学校区全体で取り組んだ方が、効果があるだろうと理解した。

【片山委員長】

本日お配りした推進計画だが、小中一貫教育目標には、特に中学校まで力を入れたい目標、進みたい方向を示していただく。めざす子ども像は、それを進めていく上でこういう子どもになってもらいたいということを、全ての関係の方々がイメージできるようなものを示す。そしてそれは、自分たちの取組みを振り返るときの一つの物差しとなる。その下の重点的な取組みの欄には、今取り組んでいることを整理して書いていただく。裏面の実施計画については、実際に取り組んだことや今後取り組む予定があるものなどを落とし込んでいく。組織体制の欄は、今の体制をどう生かしてきたのかということを、最終的に書

いていただく。そんな形で、この様式を使っていただけたらと思う。

３．今後の予定

【角銅委員】

次回は、１１月１５日（火）に行います。

これで第４回の岸和田市小中一貫教育推進会議を終了いたします。本日はどうも、ありがとうございました。

配布資料

令和4年度　●● 中学校区 小中一貫教育推進計画

1 校区の実態

児童生徒	
家庭・地域	

2 小中一貫教育目標

第2期岸和田市教育大綱の関連する基本方針

3 めざす子ども像

4 めざす子ども像に向けた重点的な取組み

小中の 協働による 取組み	
家庭地域との 連携・協働に よる取組み	

5 実施計画

月	内 容	月	内 容
通年		9	
		10	
4		11	
5		12	
6		1	
7		2	
8		3	

6 組織の体制

記入例

令和4年度　●● 中学校区 小中一貫教育推進計画

1 校区の実態

児童生徒	・近年の全国学力学習状況の結果から、国語については全国平均より正答率が低いものが多く基本的な文法事項に関する知識、情報収集の力、考えをまとめる力、わかりやすい文章で表現する力などに課題がある。算数・数学については、数量を実感をもって捉え、数学的な知識を活用していく力に課題がある。 ・テレビの視聴時間や携帯電話の利用時間の長い児童生徒の割合が高い。メールやライン、ゲームでの関わりが多く、対話を通したコミュニケーションに課題を持つ児童生徒が多い。
家庭・地域	・支援を要する家庭や教育力が弱い家庭が多く、基本的な生活習慣が十分身についていない児童生徒がいる。教育評価のアンケートでも「家庭学習に積極的に取り組んでいる」という項目に対しては、なかなかポイントが上がらないのが現状である。 ・地域住民は行事やスクールボランティアにも積極的に参加して下さり、教育活動に対し協力的である。

2 小中一貫教育目標

豊かなコミュニケーションで社会にはばたく〇〇っ子

3 めざす子ども像

・自分の考えを持ち、伝え合ったり説明したりできる子ども。
・互いのよさや個性、多様な考えを認め合うことができる子ども。

第2期岸和田市教育大綱の関連する基本方針

基本方針2−①　基礎的・基本的な力の定着
基本方針4−②　健康管理の充実

4 めざす子ども像に向けた重点的な取組み

小中の協働による取組み	〇小中で授業スタンダードを作り、具体的な実践事例をあげる。特に「学び合い」学習活動について研究をすすめる。 〇各校とも、学力向上に向けて授業改善の具体策を明確に示し、取り組む。 〇家庭学習に結びつくノート指導について研究し、各校で実践する。 〇授業のユニバーサルデザイン化をさらにすすめ、基礎基本の知識技能の確実な習得を目指す。 〇年に数回、月の生活目標を統一するなどし、3校が足並みを揃えて取り組む。 〇児童生徒の発達段階に応じたキャリア教育の推進を図る。
家庭地域との連携・協働による取組み	〇インターネットルール4か条を記入した手紙やクリアファイルを配布し、親子共にメディアの正しい扱い方について啓発していく。 〇参観日やオープンスクールに、児童生徒の自主学習例を掲示し、ノートの使い方や自主学習の進め方について保護者に啓発する。

5 実施計画

月	内 容	月	内 容
通年	推進委員会（年３回　４月、8月、2月に実施） 各部会（各校において随時実施）	9	教科の研究授業 小中合同祭礼補導
		10	教科の研究授業
5	各部会（1学期の取組方針の検討・共通理解）		
		11	3校共通清掃
6	小中連絡会 道徳授業参観 教科・道徳の研究授業	12	学習に関する中間意識調査
7	学習に関するアンケート調査	1	
		2	入学説明会（中学校生徒会による学校紹介） 教科の研究授業
8	小中合同研修会 全国学力・学習状況調査の小・中合同分析		小中一貫便り発行 小学生の部活動見学
		3	中学校教員による小学生との給食懇談 小中連絡会

6 組織の体制